

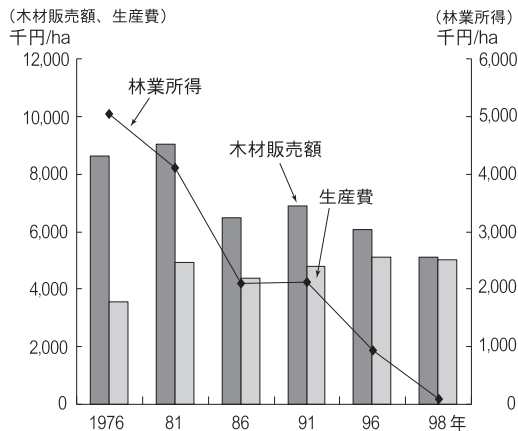
## 統計の眼

スギ生産における林業所得の推移  
 「林業をとりまく環境は一層厳しく…」  
 という言葉が常套句となっている林業界  
 であるが、その厳しさはどの程度のもの  
 なのだろうか。

日本で林業を行う場合、地形や路網密度、育林方法、生産形態等によってかかる費用も収入も異なる。さらに、植栽から伐採までが数十年以上と長期にわたることから、実際に投下された費用を厳密に算出することは難しい。以上のような理由により日本林業の一般像を描くことは困難なことである。しかし、それを前提に費用と収入の推移を一定の条件のもとで試算した(図)。

図では、日本の代表的な樹種であるスギ(1ha)を五〇年間育てた費用(育林費)と伐倒から木材市場までの運送を含めた費用(伐出費)の合計を生産費とし、収穫された木材を販売したものを木材販売額、そして木材販売額から生産費を差し引いたものを林業所得として林野庁の統計資料等をもとに試算した。その結果、八一年以降木材販売額が大きく下落するに伴い林業所得が大幅に低下している。一九九八年には、木材販売額が一〇・三万円で、生産費が五〇〇・三万円となつたために林家の手取りである林業所得はわずか一〇万円と、七六年の五〇分の一にまで下落した。さらに、林業所得の

図 林業所得の推移(スギ)



みで勤労者世帯平均収入を得るために必要な経営面積を比較すると、七六年では林家一世帯あたり三〇ha程度であったものが、九八年には三五〇ha以上にまで増大している。

実際には、林業を主業としている林家は少なく、また物価等の違いからも都市に多い勤労者世帯の収入と比較することが妥当かどうかという問題もあるが、大づかみに言って、現在の状況下で植林、保育、皆伐という育成林業を行うことは経済的に大変苦しい状況だといえる。

(栗栖)